日本イギリス哲学会関東部会 第 95 回研究例会

日時　2015 年 7 月 18 日（土）14:00～17:15
場所　慶應義塾大学三田キャンパス　研究室棟地下 1 階　第 1 会議室

プログラム

14:00～15:30

マルサスの功利主義

柳沢哲哉　（埼玉大学）

15:45～17:15

ヒュームにおける道徳の動機

峯岸明弘（国際基督教大学大学院）

関東部会担当　只腰親和（tchika◎tamacc.chuo-u.ac.jp）
矢嶋直規（yajima◎icu.ac.jp）
（◎を＠にお直しください）

日本イギリス哲学会関東部会第 95 回例会（2015 年 7 月 18 日、慶應義塾大学）

【報告要旨】

マルサスの功利主義

柳沢哲哉　（埼玉大学）

『人口論』で知られるマルサスは、政策の是非を判断するのに「幸福の集計量」や「功利の試金石」といった指標を用いた。それゆえ、ボナーのように神学的功利主義を重視するか、あるいはホランダーのように世俗的功利主義を重視するかといった違いはあるにせよ、功利主義に分類するのが通説である。これに対してウィンチは、キリスト教道徳家の側面を重視することで功利主義という分類に一定の距離を置いた。さらにクレマスキは近著(2014)で、神学的側面や徳倫理を強調することで、マルサスを非功利主義に分類した。

通説ではあるものの、功利主義という観点からマルサスの思想を整理した研究は意外と少ないように思われる。そこで、本報告はマルサスの功利主義の特徴を明らかにすることをねらいとしたい。報告では論旨を明確にする手掛かりとしてクレマスキの議論を参照する。見解の相違の多くは功利主義の定義に起因するものだが、それにとどまらない問題点を含んでいると思われるからだ。

主要なポイントは次のとおりである。(1)『人口論』初版から一貫して、人口原理を武器にした、徹底した帰結主義に立っていた。これこそがマルサスの思想の核心である。(2)快楽の質的な相違の認識もあるが、基本的には快楽主義的な功利主義と位置づけることができる。(3)「権利」や「徳」といった用語もあるが、それらは功利主義に基礎づけられており、逸脱ではない。(4)ただし、道徳的抑制を論じる際に宗教的義務論を用いている。この点では一元論ではないが、宗教的義務論は補完的なものと位置づけている点を重視したい。

ヒュームにおける道徳の動機

峯岸明弘（国際基督教大学大学院）

『人間本性論』第三巻第一部第一節でヒュームは、道徳的区別が理性に基づかないことの理由として、理性単独では行為を動機づけないことを挙げる。批判対象のクラークらとは、道徳判断には自発的な動機付けの力が伴っているという立場を共有しているので、も

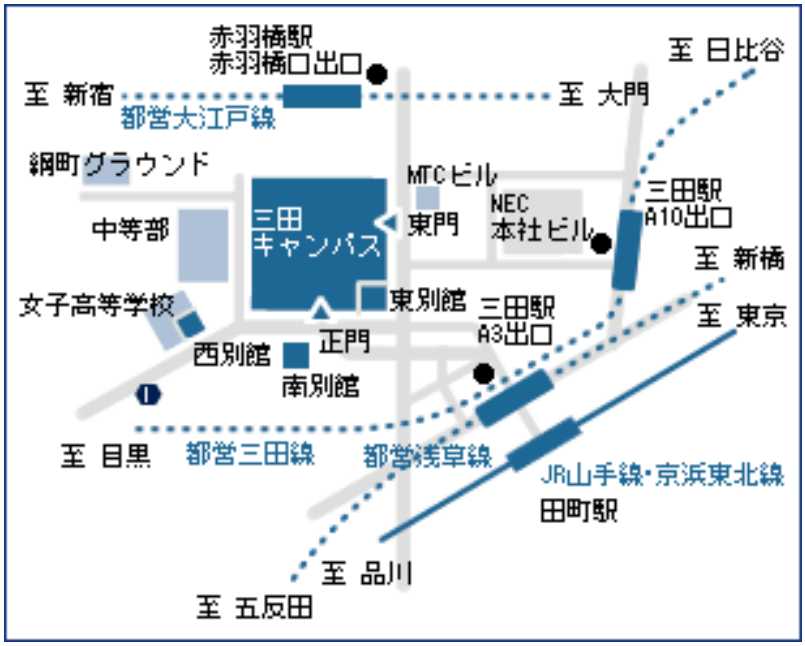
し理性にそのような力がなかったら道徳的区別は理性に基づかないと言えるのである。

理性が動機づけないことに関しヒュームは『本性論』第二巻第三部第三節に言及し、実践的推論における理性の役割は、情念が生み出す目的に対する手段と情念が寄って立つ信念の真偽の認識にあって、行為の目的は理性によっては生じないこと、ある事実認識からどのような情念を抱いたとしても理性とは矛盾しないことを主張する。だが理性主義者は、理性的認識から我々が理性的主体である限りで必然的に生じる欲求を主張している。

彼らを説得するためには、道徳的区別は理性に基づかないこと自体を示す必要があるように思われる。それが示されれば、道徳的観念と結びつくと想定される動機付けの力は、理性にはないことになる。実際ヒュームは、推論の機能と真偽の発見からは、道徳的観念が生じないことをクラークらに示した。そしてそれは、道徳は我々と独立した世界の秩序にあるのではないという自然主義の提示であった。彼の理性批判は実在論批判と地続きである。

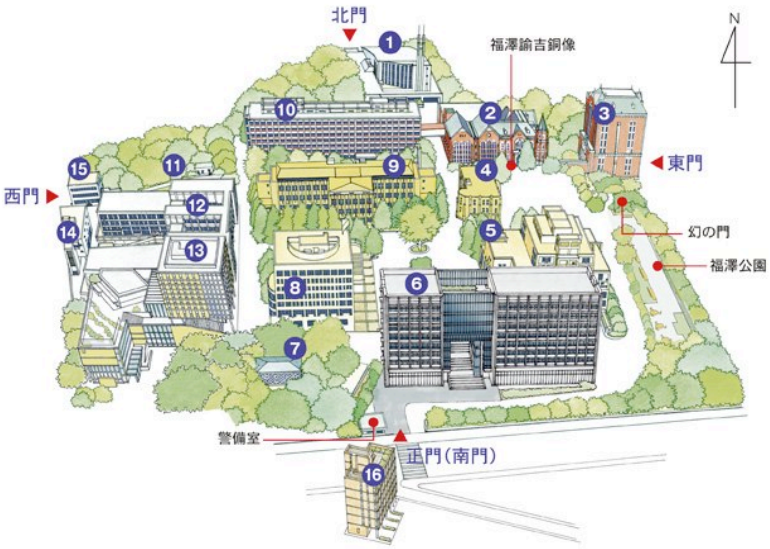
しかしその結果としてヒュームは、理性の領域を狭く見積もってはいるまいか。道徳の欲求は我々の自然本性のなかの諸欲求の一つで、その点で我々は道徳的な行為も不道徳な行為も無差別に行うことができる。「世界の破滅」（T 2.3.3.6）を望んだとしても理性に反対ではない。だとしたら道徳の欲求は、自己利益など他の外在的動機に組み込まれないと安定して行為を動機付けないかもしれない。我々の意志の内的原理である実践理性に訴える内在主義的理性主義者は、この点に関心がある。本発表はその関心に応答することを試みる。

【会場案内】



108-8345　東京都港区三田 2-15-45

JR 山手線・京浜東北線　田町駅下車、徒歩 8 分
都営地下鉄浅草線・三田線　三田駅下車、徒歩 7 分
都営地下鉄大江戸線　赤羽橋下車、徒歩 8 分



研究室棟は⑩の建物です